特集 大山に受け継がれる伝統

狂言や日本舞踊などの公演も

本校のある伊勢原市で「日本遺産」に認定されている「大山詣り」。その象徴とも言える大山阿夫利神社の秋季例大祭に合わせて、文化庁等が主催する「ニッポンたからものプロジェクト」の「日本遺産とLive Art伊勢原公演」が開催された。当日、しきたりに則り厳かな雰囲気のもと大祭は進行し、能楽殿では狂言や日本舞踊、長唄などが公演され、地元の人たちに受け継がれてきた伝統を充分に堪能できるイベントとなった。（面責任者　星）

厳かな雰囲気のなか能楽殿で行われた秋季例大祭の舞台

江戸時代から伝わる例大祭

神様に無事終わった夏を感謝

伊勢原市にある大山阿夫利神社の秋季例大祭は、江戸時代から伝わる伝統行事で、無事に夏山の季節が過ぎたことへの感謝を神様に示すために、毎年8月27日から29日に行われている。

例大祭は、27日に大山阿夫利神社上社の祠からご神体を神輿に乗せて下ろす「お下り」を行う遷幸祭で始まり、28日には、大山祇大神や高おかみ神などの神様を祀っている阿夫利神社本庁にある能楽殿で祭典が開催され、倭舞・巫女舞や能・狂言などが奉納される。そのほか、地元6地区がそれぞれ各地域ごとに神輿が会場などを練り歩く神輿渡御などが伝統として詠唱されてきた。最終日の29日には、再びご神体を乗せた神輿を担ぎ、上社の祠に返す「お上り」を行う還幸祭で、祭りは終了する。

この例大祭の日には、商店街が祭りの時間に合わせて早じまいをしたり、地元を出た人も神輿を担ぐために戻ってきたりするなど、地域住民にとっては、年に一度行われるなくてはならない祭りとなっている。

イベントも開催され

今年の例大祭に合わせて行われた「日本遺産とLive Art」は、文化庁と公益社団法人日本芸能実演家団体協議会が、2020年に東京オリンピックが開催されることから「日本を再発見しよう！」をテーマに発足した「ニッポンたからものプロジェクト」の全国展開の企画の一つとして行われた。「日本遺産」と「Live Art」を掛け合わせたイベントだ。

今回は、阿夫利神社本庁にある能楽殿で行われる奉納芸能で、司会にタレントのセイン・カミュさんを迎え、有名な山岳遍路家である廣田勇介さんが木太刀を持って行われていた大山詣りを解説。さらに、日本舞踊家の藤間直三さんと邦楽囃子の望月秀幸さんなどが、「春夏秋冬」の演奏と舞を披露した。

文化庁文化部芸術文化課の大澤亘輝さんは、「まだまだ埋もれている日本の伝統、文化を広くアピールする機会にしてもらえたら嬉しいです」と話していた。

文化庁が認定「日本遺産」

県内では2件ストーリー性重視

「日本遺産」とは、「地域の歴史的魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリー」について文化庁が2015年に創設し、認定しているもの。

世界遺産や指定文化財との違いは、価値付けや保全のための新たな規制を図る目的ではなく、地域の活性化を図る目的で認定されている点にある。現在までの認定数は67件で、神奈川県内では「大山詣り」と「いざ、鎌倉」の2件が認定されている。

「大山詣り」は、江戸時代に大山信仰が広まり、江戸の人口が100万人だったのに対し、20万人が訪れたとされる歴史背景から、「江戸庶民の信仰と行楽の地～巨大な木太刀を担いで『大山詣り』」をストーリーとして、2016年4月に認定された。

ルポ 感動を呼んだ能舞台

能楽殿には幻想的な雰囲気が

華麗に舞う倭舞「しろがねの曲」

日本舞踊「春夏秋冬」を演じる藤間直三さん

会場を盛り上げた神輿担ぎ

私が阿夫利神社能楽殿前の会場を訪れたのは午後5時を回った頃。雨上がりの曇り空だったこともあり、暗くなりかけた山景色の中で、ひときわ明るい照明に真新しく見える能楽殿が浮き上がっていた。

まだ木の香りの残る能楽殿は、舞台下には鯉の泳ぐ池があり、日没と共に幻想的な雰囲気を演出している。

公演開始時間の18時には、舞台前に設置された客席は、多くの人で埋まり、始まりを待っていた。今年の公演は、文化庁のイベントとのコラボでもあり、日本舞踊家、和楽器奏者が新作を手掛け、大山詣りの拠点として親しまれてきた大山阿夫利神社を舞台に披露される。公演が始まると、狂言や日本舞踊などの奉納が行われ、多くの人がその演目に目を奪われ感嘆の声を上げ、惜しみない拍手を送っていた。

その後、公演会場では小さな子どもがお囃子の太鼓を叩く音や、神輿を担いでいる「どっこい、どっこい」の掛け声が、静かなはずの山々にいつまでも響き渡り、会場を熱気で包んでいた。（星）

地域に進む少子高齢化

継承の難しさが問題に

小さな子も出演する能舞台

地域住民に定着し、毎年賑わっている例大祭だが、現在大山市では子どもが2～3人しかいないなど、大山も少子高齢化が進んできている。そのため、今後の例大祭での神輿の担ぎ手についても若い人が減り、伝統の継承の難しさが問題となっている。

大山地区の牧英慶君（中学3年）は、「小学生の頃から神輿に参加し、年に一回の楽しみで、毎年わくわくしています。中学生からは大人に混ざって神輿を担げるので、大人の仲間入りができたみたいで楽しいです。それだけに同じ年頃の人が少ないのは寂しいです」と話していた。

宮司 目黒久仁彦さん

続けたい大事な行事

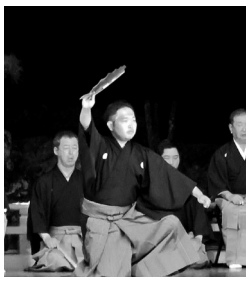
神輿が大山詣りの最大の見どころ

「大山詣りの伝統を知ってもらいたい」と話す目黒さん

本校の卒業生で、大山阿夫利神社の宮司を務める目黒久仁彦さんは、「例大祭は神輿が一番の見どころとなる伝統的な祭りです。神様に感謝を示す大事な行事で、例大祭がなくなるということは、大山が大山でなくなってしまいます」と秋季例大祭の存在意義を話した。

例大祭は、江戸時代から伝わるものだが、現在のように能楽殿での奉納芸能が行われるようになったのは、明治初期の神仏分離によって阿夫利神社が改めて神社と区分されてからだ。

目黒さんは、「命がけで神輿をおろして、最後まで人力で送り届けることに大きな意味があります。連綿と続く「大山詣り」の1ページとして、今後も伝統を継承していくことで、多くの人に知ってもらいたいと思います」と力強く話していた。



「屋島」を演じる目黒さん

THE VOICE

地元住民　石川さん　魅力を感じるお祭り

物心ついたときから、秋季例大祭は地元に無くてはならないものとして、最も楽しみなイベントです。

私は、約30年前から参加しているのですが、日本遺産になったことも影響してか、最近は参加する方が多くなってきていると感じます。

夜から行われるお祭りはとても珍しく、魅力だと思います。日本遺産になったことをきっかけに多くの人に興味を持ってもらいたいです。

日本舞踊家　藤間直三さん　現代の感覚で発信

今回の公演では、四季を体で表現し、日本舞踊の楽しさを見ている人に共有してもらいたいという気持ちを込めて演じました。

また、伝統芸能として昔のことを掘り下げながら、現代の感覚で、多くの人に発信していきたいです。

邦楽囃子　望月秀幸さん　興味を持つきっかけに

四季によって地域で見える景色が違うことを長唄で表現し、お客さんが楽しめる舞台になるように努力しました。

地元に根付くこのお祭りをきっかけに伝統芸能に興味を持ってもらい、普段触れ合うことのないものを知ってもらえたらいいなと思います。

司会　セイン・カミュさん　地域芸能の楽しさを

地域芸能が楽しく覚えられ勉強になりました。また、会場にいるお客さんを楽しく盛り上げようとして、自分の司会で場が和んでくれたことが嬉しかったです。

地域で続けてきているこの伝統を、このまま受け継いでいってほしいです。